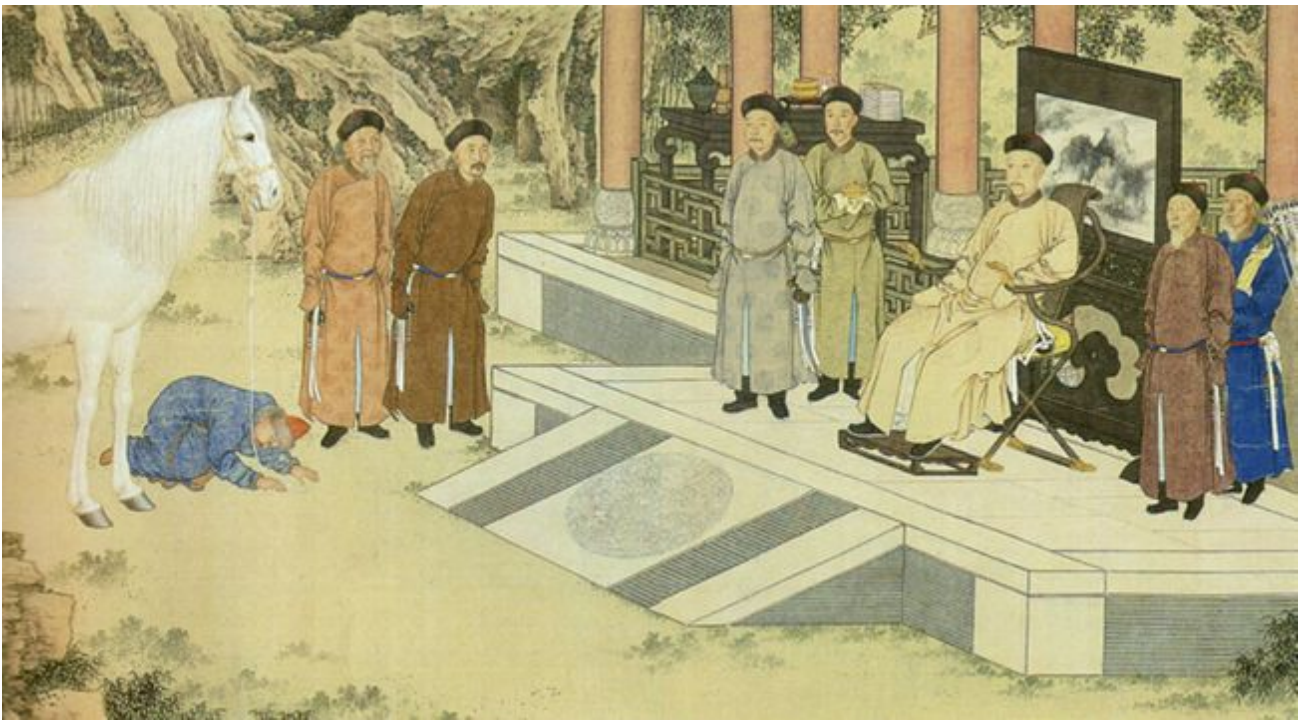


国際文化交流

吉岡憲彦

文化交流は「国」という想像の共同体が生まれるはるか以前から行われてきたが、朝貢制度に見られるように世界の覇権争いとの関わりも深く、現代においても、意図的な実践としての国際文化交流は世界平和に貢献し、文化の多様性を尊重する国際協調主義の志向性を持ちつつ、同時に今なお、ソフトパワーという国際政治上の戦略的概念に基づき「国」益追求の一環として競争的に行使され、覇権争いの文脈で語られることも多い。目指すは国際益か国益かという議論も実際の実践も、世界の分断が進むなかで、二項対立的に捉えられがちで、極端な場合には、どちらを志向した交流であっても排他的かつ原理主義的になり、ある一定範囲の「仲間うち」の関係強化で終わってしまうことも少なくない。ドキュメンタリー番組「監視資本主義ーデジタル社会がもたらす光と影」（2020年）に見られるように、本人の自覚の有無にかかわらず、個人の「現時点での」信条や価値観、嗜好をより強固にする形でデジタル環境がシステム化されているのだとすれば、コロナ禍で国際文化交流実践のオンライン化、バーチャル化も進むなか、相互理解であれ、パワーの行使であれ、異文化ならではの効果を生み出したい対象に実践の情報を届け、参加を促すことは、今まで以上に難しい。「誤配」（間違った宛先に届き、間違っ理解されること。東浩紀がジャック・デリダから抽出した概念）を含む配達をどのように担保し、多様な対象の参加を促すか、改めて考えなければならない時代が来ている。



ジュゼッペ・カスティリオーネ（清朝の宮廷画家）による乾隆帝の絵巻物（1757年） 清朝の絹・綿と交換にキルギスから白馬を貢ぐ様子が描かれている

出典: https://en.wikipedia.org/wiki/Tributary_system_of_China#/media/File:Qianlong_Horse.jpg



バンコクに拠点のある各国文化機関（左上から時計周りに、国際交流基金、ゲーテ・インスティトゥート、韓国文化センター、中国文化センター）



TOP 10 SOFT POWER NATIONS



Source: Brand Finance Soft Power Index 2020

brandirectory.com

文化には本来順位がつけられないはずであるが、文化もその一つの源泉とされるソフトパワー論では各国の競争力が注目され、様々な方式でのランキング発表がある。



『プラータナー：憑依のポートレート』（2018年-）

写真：ソーパナット・ソームカンガン

主催＝国際交流基金アジアセンター、原作＝ウティット・ヘーナムーン、脚本・演出＝岡田利規 バンコク初演後、パリ、東京へ。創作面での国際協働（コラボレーション）のみならず、制作面での国際協働（コ・プロダクション）も模索され、国際文化交流事業の一つの画期となった。

関連リンク

- 国際交流基金 <https://www.jpfa.go.jp>
- 中国文化センター <http://cn.cccweb.org>
- 韓国文化院/文化センター <http://www.kocis.go.kr>
- ゲーテ・インスティトゥート <https://www.goethe.de>
- ブリティッシュ・カウンシル <https://www.britishcouncil.org>
- アンスティチュ・フランセ <https://www.institutfrancais.com>